甘蜜三姉妹

Amamitsu 3 Sisters

兄嫁と未亡人と女子大生

北條拓人
挿絵／天音るり

試し読み版

リアルドリーム文庫

目次

Contents

序章　盗み見た兄嫁の嬌態……4

第一章　教えてあげます……。熟未亡人のやさしい指南（てほどき）……22

第二章　お世話したいの……。ショタコン女子大生のコスプレご奉仕……93

第三章　ぜんぶ射精させてあげる……。美人姉妹の子宮に注いで……155

第四章　耽溺れてほしいの……。ついに憧れの兄嫁に淫蕩けて……202

終章　並べて犯して……。淫ら三姉妹は僕の宝物……259

登場人物

Characters

蓮杖 敬悟
(れんじょう けいご)

兄嫁の紗季に憧れを抱く男子高校生。大学受験に備え、兄のマンションに居候することになった。

蓮杖 紗季
(れんじょう さき)

夫の単身赴任と入れ替わりに義弟と暮らすことになる知的な眼鏡美女。翻訳家の仕事をしている。

神部 志穂
(かんべ しほ)

紗季の実姉で三年前に夫を亡くしている未亡人。姉妹の中でも最もむっちりしたボディを持つ。

速水 優衣
(はやみ ゆい)

紗季の妹で女子大生。敬悟を溺愛しており、積極的に淫らな誘惑をしてくる。

「兄嫁を義弟が犯すなんて、いくらでもある話だ。ＡＶなんかでも定番だろう？」
アダルトビデオと現実をごっちゃにするあたりが、紘一の幼い精神年齢を物語っている。
「うん。逆に弟の彼女を手籠めにする兄ってのもよくあるシチュエーションだな……。敬悟が紗季を犯したら、俺がその報復に優衣（ゆい）ちゃんを寝取るのもありだな……」
独りごちるように優衣の名を口にする紘一。不意打ちのように速水（はやみ）優衣の名を出され敬悟は少し慌てた。
「優衣ちゃんは、僕の彼女じゃないのだから報復になんてならないし……。第一、彼女は兄貴の義妹でもあるのだから、そんなことしたらまずいだろう！」
優衣の貌を脳裏に浮かべながら敬悟は兄を思いとどまらせようとムキになった。全ては、妄想に妄想を重ねたような与太話なのだから、ムキになるまでもないのだが、この兄なら本当にやりかねないと慌てたのだ。
優衣とは、今年大学四期生となる紗季の年の離れた妹のことだ。
ちなみに紗季は三姉妹の真ん中であり、さらに上には、今年三十二歳になる神部志穂（かんべしほ）がいる。
三人揃うと、『美人三姉妹』とのお題で描かれた錦絵の如くで、華やかかつ艶やか

であることこの上ない。
どういうわけか敬悟は、この三姉妹から絶大な人気を誇っている。
とりわけ優衣は、敬悟がお気に入りであることを隠そうともせず、会えば紗季以上に甘やかしてくれる存在だ。
それも本当の弟のように接する兄嫁とは少し異なり、まるで年下の彼氏のような扱いを受けている。
もちろん、兄嫁に負けず劣らず美形の優衣に、そんな風にしてもらうのはうれしい。
実際、紗季への想いがなければ、優衣に彼女になって欲しいくらいなのだ。
インドア系の義姉とは正反対に、優衣は太陽がよく似合う女性だ。
明るい性格で、いつも楽しそうにしていて笑顔を絶やすことがない。
ぱっちりと大きな瞳は、やや強い目力を感じさせる。鼻梁のすっと伸びた高い鼻は、日本人には珍しいほど。桜のような唇は、厚すぎず薄すぎず、瑞々しくもぽちゃぽちゃとやわらかそう。
それらどれをとっても完璧なパーツが、シャープなフェイスラインの小顔の中に、すっきりと納まっているのだ。
敬悟より五つ年上の彼女は、美少女から大人の女性へと華麗な変貌を遂げている。

何気に微笑むだけで、敬悟をドキリとさせるほどの超絶美形なのだ。しかも、まるで紗季と似ていないようでいて、どこかしらに紗季の面影が見え隠れするから、敬悟としては始末が悪い。

さらに言えば、優衣の美しさは、顔ばかりではない。

文句なしに抜群のスタイルで、身長百七十近くの長身が、見事なまでにボン、キュッ、ボンと美しい流線形を描いている。

手足が長く細く、腰高でスレンダー。しかも、バストやヒップは丸く豊かなボリュームにはち切れんばかりに実っている。

どこまでも完璧すぎて、フィギュア人形を思わせるプロポーションだ。

そんな彼女が、敬悟のどこを気に入ったのか、愛玩人形よろしく、下にも置かない扱いで可愛がってくれる。

もしも筆おろしを本気でお願いしたなら、「敬ちゃんなら、いいよ」と、二つ返事で許してくれそうな勢いだ。

正直、敬悟とて、その想像をしたことがないと言えばウソになる。

飛び切りの美人であり、しかも、ナイスバディの優衣に迫られたら、瞬殺されてしまうであろうことは想像に難くない。

「お前は、紗季に惚れているから気づかないかもしれないが、優衣ちゃんの方は、絶対にまんざらじゃないと思うぞ。まあ、でも優衣ちゃんに手を出したりしたら義姉さんに殺されるか……」

人たらしの紘一が唯一苦手にしている志穂を思い出したらしく、急に背筋をぶるぶるっと震わせて、敬悟の部屋を出て行ったものだ。

（ダメだ！　絶対に兄貴に、紗季義姉さんを任せておけない。僕には悪い兄貴じゃないけれど、義姉さんの夫としては最悪かも……！）

バカ兄貴とは知っていたものの、あそこまでのバカだとは思っていなかった。しかも、紗季のような美人妻を持つ身で、好きな相手ができたなどと弟に告白する幼稚さ。あれで、もうすぐ三十歳になるのだから、あきれてものも言えない。

ならば、余計に自分がしっかりし、大切な兄嫁を守らなくてはならないではないか。

（僕が、紗季義姉さんをしあわせにしてあげるんだ！）

どうすれば、兄嫁を守れるか、守らせてくれるか。それさえも見当がつかないが、その思いだけは、ますます強くする敬悟だった。

2.

「紗季義姉さぁん。ハサミ貸してくださぁい！」

居間の扉を開く前から、用件を口にするのは、何とはなしの照れ隠しだろう。

けれど、扉を押し開けた瞬間、ムンと押し寄せる蜜のように濃厚な匂いと湿度に、敬悟は心臓を鷲掴みにされる思いがした。

何事かと扉をくぐり奥へと歩を進めると、悩ましい光景が繰り広げられている。

「あっ！」

短く声を上げた敬悟に、二人の美女がこちらを振りかえった。

「あら、敬悟くん。こんにちは……」

黒というよりメタルブラックに近い色合いのキャミソールレオタードに身を包んだ女性が、にっこりと微笑み敬悟にあいさつをしてくれる。

そのエレガントな笑みの持ち主こそ紗季と優衣の姉、三姉妹の長女であり五年前に夫を失った未亡人の神部志穂だ。

そう言えば、朝食の折、紗季から志穂が来ることを聞かされていた。

すっかり忘れていたのは、兄嫁のことばかりが頭を占めているからだ。

翻訳家の仕事で忙しく、ほとんど家に引きこもり状態の妹を見かね、自らが通うヨ

ガ教室で教わったことをこうして紗季にもやらせているらしいのだ。
「姉さん。強引なのよね。でも、運動不足の解消にもなるし、ダイエットにもいいらしいから……。この頃お腹のあたりにお肉が付いちゃって……」
無駄な脂肪などほとんどついていないお腹を摘まむ仕草をしながら、敬悟におどけて見せる義姉。怜悧な美貌が、はにかむような表情へと変化していく。
「だから、ほら、そんな恥ずかしい姿を敬悟くんに見られたくないのよ。その間だけ、お部屋にいてくれる？」
なぜ義姉がそんなことを言っていたのか、ようやく理解できた。
いわゆるビキニスタイルの黒のヨガウエアーは、動きやすさと通気性を重視したスポーツブラと二分丈のスパッツを履いただけのセクシーな姿。デコルテラインやくびれた腰、お腹周りは露出させ、背中などは、伸縮性に富んだブラ紐がクロスするばかりで、ほとんど何もつけていないに近い恰好なのだ。
機能性重視の飾り気のないウエアーながら、素肌の露出度が高い上に、覆っている部分もぴっちりと張り付いているため、そのボディラインをはっきりと浮き上がらせ、スレンダーな肢体を際立たせている。
その格好に唯一、不釣り合いな赤いセルフレームの眼鏡は、お手本となる姉の姿を

追うために掛けているのだろう。
義姉は、その姿を敬悟に見られることを恥ずかしがったのだ。その証拠に、兄嫁は恥じらうように頬を紅潮させ、困ったような表情を浮かべている。
けれど、姉の手前もあり、ヨガの最中にカラダを隠すことも、敬悟に見るなと言うこともできずに、素知らぬ風を装いヨガに専念するしかないのだ。
敬悟の方も、その言いつけを忘れ、闖入(ちんにゅう)してしまったことを詫びるわけにもいかず、さりとて紗季と志穂から目を離すこともできずにフリーズしている。
(ああ、紗季義姉さんのボディライン。やっぱり綺麗だ……。スレンダーなのに、やわらかそうで……)
呆けたようにうっとりと見つめる敬悟に、再び志穂が声をかけてくる。
「敬悟くんもやってみない？　勉強の息抜きになるわよ。リラックスできる上に、集中力を高める効果もあるのだから……」
こちらを振り向いた未亡人の悩ましい胸元がぶるんと揺れた。スレンダーな紗季とは対照的に、肉感的な身体つきをしている。
(わわわわっ。志穂さんのカラダつきもエロい！　胸もお尻もむっちりだぁ……)
肉感的ではあっても決して肥えているわけではなく、むしろスリムな体型をしてい

る。なのに、付くべきところに肉が付いているから、ムッチリと感じさせるのだ。
それ故に、キャミソールレオタード姿がひどくセクシーに映る。
細い肩紐と大きく開いた胸元、背中の方もぱっくりと大きく開かれたそのレオタードは、ヨガ用というよりもむしろバレエの練習着に近い。
特に敬悟の目を引くのは、レオタードを大きく盛り上げる乳房だ。
家系なのか三姉妹は、胸の豊かさに恵まれている。
一番小さいと思われる紗季のバストですら、つんと上向きに大きく盛り上がっている。けれど、志穂の乳房は、その比ではない。巨乳を売りにするグラビアアイドルですら裸足で逃げ出しそうなほどマッシブに実っている。
そんな姿で腕を真っ直ぐに持ち上げたり、片足立ちして女体を床に垂直にするなどのポーズをゆっくりと決めていくのだからたまらない。
志穂がカラダを捩ったり、反らしたりするたび、その大きな乳房が自在に容を変えながら、ぶるん、ぶるんと揺れている。
憧れの兄嫁は兄嫁で、姉に負けじとその女体を柔軟に反らせたり、鋭い平衡感覚を見せつけるように片足立ちして、両腕を絡め天に突き上げたりしている。
紗季の白い腋下が見えるだけで、敬悟はドキドキさせられてしまう。

未亡人に誘われるまま、敬悟も見よう見真似でヨガのポーズを取っていくが、常に頭だけは彼女たちに向けているため時折、変に身体が捻られたり、妙なポーズになっていたりする。

けれど、〝見よう見真似〟がミソで、それを口実に兄嫁と未亡人をほぼ視姦に近い目で見つめることができるのだ。

ゆっくりと彼女たちは四つん這いになった。その後ろで敬悟も四つん這いになる。

右手を前に突き出し、左足を真っ直ぐに伸ばしている。

二人ともに、すらりと伸びた足のラインが美しい。とりわけ、義姉は腰高で、華奢な美脚なのに、太ももは艶めいて色っぽい。

やがて雌豹のポーズ。

お尻をこちらに突き出すようにして高く持ち上げ、背筋を鯱(しゃちほこ)のように反らしている。

普段学校の体育の授業くらいでしか運動をしていない敬悟も、うっすらと汗をかきはじめる。

視姦するのに忙しく、いい加減に身体を動かしているだけでも汗が滲むのだから、真剣に取り組んでいる彼女たちが背中や額に汗を流しているのも頷ける。

そのウエットな感じの女体が、また美しくも扇情的なのだ。

（ああ、それにしてもなんていい眺めなのだろう。志穂さんのムチムチのお尻……。紗季義姉さんの桃みたいなお尻もたまらないよお……）

高く掲げられた兄嫁の美尻に、密着したスパッツの薄布が食い込み、時折、白魚のような指がその位置を直すようにセクシーに引っ張る。

隣の未亡人も同様に、レオタードのV字の食い込みを直している。

お陰で大きな丸いお尻の形状が手に取るように分かった。義姉の引き締まったお尻もいいが、未亡人のお尻はより刺激が強く、敬悟は密かに勃起させている。

改めて敬悟は、肉付きのいい見事なプロポーションを惚れ惚れと見つめた。

（ヨガって、こんなに見事にカラダを引き締めるんだ……）

スポーツ選手にありがちな筋肉質な引き締まり方とは違う。余計な脂肪肉が絞れた上に、おんならしい肉の付き方になるらしい。

もちろん、生まれ持っての真っ直ぐに伸びた手足、プロポーションもあるだろう。紗季のスレンダーボディやその姉のエロボディは素材がいいからこそ、ここまで磨かれて光るのかもしれない。

ゆったりとカラダを動かし、ポーズを決めるだけのヨガが、これほど美容にいいとは驚きだった。

そこに大人のおんなの美と色気、さらには熟れた魅力が加味されているから、ほとんど凶器に近い。敬悟などは、軽く瞬殺されている。いつまでも見つめていたい気持ちで切ないくらいだ。

居間には、神秘的な音楽が小さく流されている。それがまた異世界に迷い込んでいるようで、不思議な倒錯を覚えた。

二人は開脚して前屈し、べったりと女体をヨガマットに付けている。

やわらかな女体は難なくマットに胸元を付け、自分の足首を握りしめる。

さすがに敬悟にはそんな真似はできない。諦めて、ただ床に座り、二人の美しい背中を見つめていた。

「もう。敬悟くんたら、こっちを見すぎよ。ずっとお尻を見ていたでしょう？」

ふいに未亡人がこちらを振り向き、コケティッシュに顔をしかめて見せた。

気づかれていたことに、焦りながらも、うまい言い訳が思いつかない。

「若い男の子には、ちょっと刺激が強すぎたかしら……」

けれど、志穂の目は怒っていない。あるとすれば、可愛い悪戯者の仔犬を叱るようなニュアンスだ。

恐る恐る、兄嫁の様子も窺うと、こちらの方は、まるで恥じらう乙女のよう。赤い

セルフレームを載せた頬が、桜色に紅潮している。
（うわあああ！　紗季義姉さんが、カワイイ～～っ!!）
凛とした雰囲気を霧散させ、初々しくも恥じらうばかり。どうしていいのか判らないらしく、所在なげに俯いては、身体を左右に揺すっている。
「うふふ。まあ、いいか。仕方がない。もう少しだけ、目の保養をさせてあげるね」
何が仕方ないのか、未亡人は愉しげな口調でそう言うと、ゆっくりと立ち上がりまた新たなヨガのポーズを、今度はこちら向きでとりはじめる。
またしても片足で立ち、カラダを捩りながら伸ばした足をつかみ取る。
これもまた、ヨガに慣れていなければ、容易にはできない。
さすがに兄嫁にも、これは難しいらしく、姉のポージングをじっと見ている。
やがて志穂は足を降ろし、すっと真っ直ぐにこちらに向かって立つ。
するとどうだろう。正面を向いた未亡人のふっくらと隆起した恥丘の下に、少女のような完全な亀裂が出来上がっていた。
（おおおっ！　す、すごい！）
メタリックブラックのレオタード生地に浮き上がった陰唇の輪郭に、敬悟の分身が根元からドクンと脈打った。すでに十分以上に勃くらませていたところに、その淫裂

への食い込みを目の当たりにし、興奮度、勃起度をさらに急上昇させてしまった。
動きやすい服装の彼女たちと違い、敬悟はジーンズのままでいる。自然、窮屈に押し込められていた逸物が限界まで強張り痛いほどに疼いた。
さすがに、彼女たちにバレはしないかと気が気でないが、意に介さずに未亡人はまた異なるポーズに取り掛かる。
義姉も同じポージングをはじめたから気づかれてはいないらしい。
けれど、今度の彼女たちのポーズは、さらにすごかった。
仰向けにぎゅんと背筋を反らせブリッジしたかと思うと、そのまま両肩を付け両膝を立てている。まるで正常位で、下から男を突き上げるような体勢だ。
股間があられもなく開かれているのも敬悟を煽る。
(ああ、見えちゃうよ……。もっと股を開いて……!)
そんな敬悟の心の声が聞こえたのか、パカっと股間がしどけなく開かれていく。まるで敬悟を迎えるかのようなポージングに、完全に悩乱させられた。
特に、未亡人の光景はすごい。
レオタードの股の部分、クロッチ部には当て布がないため、開脚してしまうと、その布地がぴったりと密着して、またしても割れ目に食い込もうとするのだ。

（まずい。相当にまずい。ああ、志穂さんが、見せつけてくる……！）
そうとしか思えない。実際、未亡人は目の保養をさせてくれると言っていたのだ。
敬悟は、自らの牡シンボルに触りたくてたまらないのを必死で堪えた。二人の前でなければ、猛然と自慰をはじめたはずだ。
恥裂の食い込みは、熟未亡人の太ももが揺れて、視界を遮ったり、また見えたりするが、最早興奮が飽和状態に近く、いてもたってもいられない状態にある。
「あの、ぼ、僕、ちょっと用事を思い出しました！」
たまらずに敬悟は、見え透いた言い訳を残し、自室へと退散した。

3.

「なんか緊張するなあ……。ここにお邪魔するのも久しぶりだものなあ……」
都心の一等地とはいかないまでも、ここが高級マンションであることは想像に難くない。不動産に疎い高校生に、高層にそびえ立つ威容が、そう物語っている。
亡くなったご主人は資産家であったと聞いている。常に優美なオーラを身に纏う志穂は、やはりセレブな有閑マダムなのだ。
「志穂さんの凛とした佇まいって、こういう場所に似合っているよなあ……。きっと

あの上品さが、兄貴は苦手なんだろうなあ……」

そればかりではない。元々、三姉妹は一般家庭よりもヒエラルキー上位の家庭に育っている。

何せ父親の仕事の都合で、一家で移住した先が南仏なのだ。そこでの経験が彼女たちの身のこなしや考え方に大きな影響を及ぼしているのだろう。

中でも、志穂の持つ雰囲気は、ずぬけて際立っている。十二歳から十七歳という多感な時期を過ごしたと聞いているから、それも不思議ではない。

培われた気品がある上に、さらに未亡人特有のバリアにも似た気の張りのようなものが、並みの男など寄せ付けなくしている。けれど、そんな志穂も敬悟にだけは、バリアオーラを張る気配がない。おそらくは、端から子ども扱いしているからそんな必要すら感じていないのかもしれない。

本来の志穂は、すこぶるやさしく、おおらかな女性だ。

涼やかな人形さながらに整った顔立ちに、すらりとした肢体は、とても三十路を二つも過ぎているようには見えない。

二十代前半でも十分通る若々しさなのだ。それはおそらく、ぴんと張った滑らかな肌が、そう印象付けているのだろう。

例えば、その眼。ぱっちりとした双眸の中、くりくりと黒曜石の如き黒目がちの瞳が澄んだ輝きを煌めかせている。涙袋がぷっくらしているのも、彼女の場合その美人度を高める要素だ。やさしさ、柔和さ、知性の深さも、その瞳の輝きからにじみ出ている。

例えば、その口。少し受け口気味が可愛らしい花びらのような唇。見ているだけで切なくなるほど、その唇に吸い付きたくなってしまうほどの魅力を秘めている。

その鼻は、二人の妹ほど高くはないけれど、その大和なでしこらしい造詣が美しい。

ほっそり、すっきりしたあごのラインも、すべらかな頬も、いずれも負けじと優美さを競う。

丸くなめらかな額には、少し太い眉が、その意志の強さを表すように線を引く。

髪型は、ややブラウンに染めた豊かな髪をアシンメトリーな前髪に、トップ短め、襟足長めにしている。いわゆるボブヘアながら、長めの髪が特徴的で、フェミニンで可愛い。

そんな彼女に御呼ばれするのだから緊張しない方がおかしい。たとえ、子供のころからよく知っているにしてもだ。それにここには、優衣も一緒に住んでいるのだから、敬悟としては意識せずにいられない。

（でも、僕には紗季義姉さんという想い人がいるのだから、そんな緊張する必要なんてないじゃないか！）

食事をご馳走すると誘ってくれたのは志穂。ヨガを終えた帰り際に、来週の週末にと約束してくれたのだ。

自らを叱咤激励し、敬悟はマンションのオートロックに、部屋の番号を入力した。

「ああ、なんだってこんなにドキドキするんだ？　はじめて来たわけでもないのに……」

電子的な呼び出し音が響くたび、心臓が鼓動を速める。しばらくしてようやくカチャリとインターフォンを取る音がすると、心臓が口から飛び出しそうになった。

「はい」

やわらかな返事は、間違いなく志穂の声。

「あ、け、敬悟です。蓮杖敬悟」

焦らずとも彼女には、カメラの映像が届いているはず。それを思い敬悟はカメラの向こうの志穂に小さく頭を下げた。

「ああ、敬悟くん。もう着いちゃったのね……。でも丁度いいかも。とにかく早く上がってきて……」

いつもの未亡人とは違い、どこか慌てている様子。自動で開いたガラス扉までが、

急かしているように思われた。
さっきまでの胸のときめきは、どこへやら、何事かと、敬悟は大急ぎでマンションの内側に足を進め、エレベーターに乗り込んだ。
志穂の部屋のある十二階に着いてからは、回廊を目的の部屋まで走った。
今度は玄関前に取り付けられたインターフォンを鳴らす。
「は～い」
やさしい声が、扉の内側からすぐに響いた。
わざわざ志穂は、ドアの前で待っていてくれたらしい。
「こんばんは。敬悟です。今、着きました」
セキュリティがしっかりしているからこそ、同じ挨拶を二度するはめになる。
「よかったわ。敬悟くん。さあ、入って……」
整った顔立ちが、ひょいと突き出されたかと思うと、敬悟の腕を取り、玄関の内側へと招き入れてくれる。
「えっ！　し、志穂さん？　うわあああああっ！」
玄関に引き入れられた敬悟は、志穂の全身を目にして素っ頓狂な声を上げた。
いつもは清楚で慎ましやかな未亡人が、バスタオル一枚を女体に巻き付けただけの

姿でそこに立っているのだ。
「あうわあああっ」
何かを言葉にしようと思っても輪郭をなさない。
先日、視姦したレオタード姿よりはるかに艶めかしいのだから、それも無理はない。
よく手入れのされた玉の肌は、透明度が高く眩いまでに白く悩ましい。オレンジ色の玄関の照明にも、光沢を帯びた絹肌は、ツヤツヤと輝いている。
そんなあられもない恰好をしているのに、相変わらず未亡人は上品に映る。その物腰や仕草、発せられるオーラが違うのだ。
「ごめんね。敬悟くん、こんな姿で……。敬悟くんが来る前に、シャワーを浴びようと思ったら、蛇口が壊れたのか、お湯が止まらなくて……」
なるほど、彼女が言う通り、頭からずぶ濡れでいる。
細く華奢な肩やデコルテラインを火照らせているから、水を浴びてカラダを冷やしたとかではないらしい。でないと、いくら四月も後半になっているとはいえ、風邪をひいてしまいそうなほどの濡れネズミなのだ。
「お願い。敬悟くん、何とかできない？　管理人さんを呼ぼうにも、こんな格好ではと思っていたところなの……」

困り顔の志穂は、ほぼノーメイクのよう。それでも彼女は、美しい。
「あ、じゃ、じゃあ、見てみますね。とりあえず、お湯を止めればいいのですね」
水道屋でもあるまいし、敬悟の手に負えるかは危うい。それでも、志穂が困っているのだから、引き受けずにいられない。
「ありがとう。こっちよ」
頷いた敬悟の腕を引っ張り、浴室に案内してくれる志穂。お陰で、白いバスタオルに押し込まれた胸の谷間が、敬悟の肘どころか腕にまで当たっている。
上品な顔立ちに似合わぬほど、色っぽくもムチムチと熟成した肉体。ビーナス像のように肉感的でありながら、肥え太っているわけでなく、健康的に実らせていながらも、絞るべき所はきゅっと締まっている。それはきっと、あのヨガのお陰なのだろう。聞けば、志穂はもう十年以上も続けており、インストラクターになれるほどなのだという。
そして天然の肉房。見事なまでにたわわなふくらみは、小ぶりのスイカほどもある。バスタオルの白さに負けないほどの乳肌が、押し合いへし合い艶光して艶めかしい。その乳房が、やわらかくも弾力たっぷりに敬悟の腕に当たるのだ。お陰で、心臓のドキドキがまたぶり返している。

まるで女性に免疫のない童貞だけに、乳房の感触など知らずにきた。
バスルームまでの道のりは、雲の上を歩くかの如き心地だった。けれど、それは儚いまでに短い時間で、すぐに目的の場所に着いた。
畳二畳分ほどのスペースの脱衣場の向こう側、バスルームからシャワーヘッドが、お湯を噴出させる音が聞こえる。
「敬悟くん、お願い。何とかして……」
すがるような眼差しを受け、敬悟はユニットバスの扉を開ける。途端にもうもうとした湯煙がこちらへと流れた。
手早く靴下を脱ぎ捨て、ジーンズの裾をなるべく大きくまくり上げる。シャツも腕まくりすると、敬悟はバスルームの中に足を踏み入れた。
なるほど、この湯の勢いでは、志穂が濡れネズミになるのも道理。
手始めに、ザーザーと湯を吐き出すシャワーヘッドに手を伸ばし、壁側に向けた。勢いよく跳ね返る水しぶきは止むを得ないが、これで少しは濡れる量が軽減される。
この程度のことにも思い当たらないほど、未亡人は動転していたのだろう。
あるいは、裸で入浴していた分、濡れることに抵抗がなかったのかもしれない。
敬悟は、視線をシャワーに繋がる蛇口へと運び、それに手を伸ばした。

けれど、いくら捻っても、まるで抵抗がなく、一向に湯の勢いは衰えない。どうやらカランが壊れているらしい。

カランは、湯と水の二つが付いた混合栓と呼ばれるタイプで、敬悟が捻ってみたものは、赤い印のついた方。つまりは、湯量を調節するカランだ。

ならばと、青い印の蛇口をひねると、こちらは普通に抵抗があった。

回せるだけ蛇口を捻ると水が止まった分、シャワーから吹き出される湯量も減った。けれど、その分、湯の温度が上がったようで、白い湯煙がもうもうと勢いを増す。

「これじゃあダメみたいですね……。あれ、でも待ってよ。こういうのって、普通、元栓がありませんか？」

思いついた敬悟は振り返り、ずっとこちらを見守っている未亡人に尋ねた。

「そうね。あって当然よね。でも、それって、どこにあるのかしら……」

こういうことに疎い女性は多い。やむなく、敬悟はカランの出ている壁を一通り調べる。すると、樹脂製の壁に何か書かれていることに気づいた。

昨今のマンションは、ほとんどがユニットバスとなっている。高級マンションであっても、ランクの高いユニットであるだけで、それに変わりはない。

「ああ、カランの下は、パネルになっていて外せるんだ……」

濡れるのも厭わず、屈み込んで説明通りにパネルを外してみる。すると、そこに求める元栓があった。
「ああ、これこれ。これをこっちに回せば……」
言いながら栓を捻ると、みるみる内に湯が止まっていく。
「きゃあ。敬悟くん。すごぉい！　ありがとう」
羨望の眼差しで称えてくれる未亡人の色っぽい生足に、またぞろ敬悟の心臓が躍りだした。

4.

「ああん。どうしましょう。敬悟くん、すっかりびしょ濡れ。頭までこんなに濡らして……」
身悶えせんばかりにしながら、バスタオルで敬悟の頭を包み込み、くしゃくしゃにふき取ってくれる志穂。彼女自身は、未だにその艶めいたボディに白いバスタオルを巻きつけたままの姿だ。
「風邪をひかせちゃったらどうしよう……。ねえ、そのシャツを脱いで……。まずは、こっちのタオルで身体を拭いて……」

自らのことは二の次に、甲斐甲斐しく敬悟の面倒を見てくれる。
心底心配そうな表情で、こちらの目の中を覗き込んでくる志穂の瞳の美しさ。その距離間にどぎまぎしながらも、吹きかけられる蜜のような甘い息を自らの肺に吸い込まずにいられない。
「そんな大げさですよ。冬じゃないのだし……」
狭い脱衣場で、一生懸命拭ってくれる未亡人に、敬悟は照れくささを感じる一方で、ドキドキが止まらない。
バスタオル越しながら、まるで敬悟の頭を抱きすくめんばかりにして、拭ってくれるのだ。勢い前屈みになると、すぐ目と鼻の先に、豊かな谷間が待ち受けている。
デコルテラインの艶やかな白さも、敬悟の理性を奪っていった。
（うあああっ。やばいよ……。志穂さんのおっぱい、近すぎるぅ～～っ！）
そのふくらみは女性の美しさを代表する部位であり、敬悟を最も昂らせ挑発するセックスアピールであり、やさしい母性の象徴でもある。
とりわけ、まだおんなを知らないこともあり、乳房は未知なる憧れの対象に他ならない。その乳房が間近にあるのだ。タオル生地の直下、手を延ばせば届く所に。それも、そのふくらみは、高校生の敬悟などには、もったいないほどの高嶺の花だ。

「ねえ。敬悟くん。そのジーンズも脱いで。恥ずかしいかもしれないけれど、そんなに濡れたジーンズを履いていたら風邪をひいてしまうわ」
敬悟の欲情に一ミリも気づいていないのか、未亡人が困った指示をしてくる。
恥ずかしいのはもちろんだが、何よりも困ることに敬悟は勃起させているのだ。
それも根元から切っ先までギンギンに強張って石のように硬くなっている。仮性包茎気味の包皮など、すっかりずる剥けになるほどの強張りようだ。
「ほら、本当に風邪をひいちゃう。それともわたしに脱がせてほしいの……？」
未亡人が冗談めかせたセリフは、敬悟の恥ずかしさをほぐそうという心配りだろう。けれど、かえってそれが敬悟のイケナイ想像を刺激する。
「いえ。その。そんな……。でも、ジーンズは……」
もじもじしてなかなかジーンズを脱がずにいる敬悟。
「もう。本当に脱がせちゃおうかしら……。あっ！　ああ……。そ、そういうことなのね……」
焦れた未亡人は本当にジーンズに手を伸ばした瞬間に、敬悟が躊躇う理由に気づいた。
「あの……。ごめんなさい。その……。志穂さんがあんまりセクシーすぎて……。お

かしな気分になって……」
顔から火が出そうなほど赤くなっている自覚がある。にもかかわらず、これほど固くなった勃起だから、容易には収まらない。
とても志穂の目をまともに見ることができず、顔を俯けるしかなかった。
「あんっ……。敬悟くん、謝ることなんてないのよ。むしろ、悪いのはわたしなのだから……。女性に興味を持って当然の年頃の君の前で、わたし、ずっとこんな格好をしているのだもの……」
「でも、志穂さん、気分を害していませんか……？　気持ち悪いとか思われそうで……」
まるで痴漢でも咎められているような心持ちで敬悟は恐縮している。そんな思春期特有の思考回路に、志穂がクスクスっと笑った。
「大丈夫よ。心配しなくても。わたしだって、少しは男の子のこと判っているつもりだから。気分を害するなんてことないわ。うーん。正直に言えば、むしろその逆ね。うれしいかな……」
「うれしい？」
「だってそうじゃない。敬悟くんが、こういう反応をしてくれたってことは、まだま

だ、わたしにもおんなとしての魅力があるってことじゃない。敬悟くんは、わたしより十五も年下なのよ。そんな男の子がときめいてくれるなんて、むしろ光栄よ」

そう言いながら志穂は、コケティッシュな笑みを見せてくれた。

「あのね。敬悟くん。この辛そうなくらい大きくなったおちんちん。わたしに楽にさせてもらってもいい？　こんなことになったのもわたしに責任があるのだし……」

「ら、楽にってそんな……。責任なんて……」

突然の未亡人の淫らな提案に、敬悟は明確な断りを言えなかった。

本気で紗季を想うなら、きちんと断るべきと判っている。けれど、かつて見たこともないほどフェロモンを振りまく未亡人の誘いは、あまりにも魅力的すぎる。

敬悟はごくりと生唾を呑み、またぞろその肢体に欲情を込めた視線を送った。

「そうよ。その敬悟くんの視線がわたしの理性を溶かしてしまうの……。先日のヨガの間もずっと見ていたでしょう？　紗季のことばかりじゃなく、わたしのカラダも舐めるように見ていたわ……。あんまり熱い視線に、カラダが火照るほどに……」

言いながら未亡人が、さらににじり寄り、ほぼゼロ距離にまでその身を寄せた。

自然、バスタオルに隠された豊かなふくらみが、敬悟の胸板に当たり、やわらかく潰れる。小ぶりのマスクメロンのような乳房から甘い芳香が漂う気がした。

柳腰から美臀へと至る成熟した流線。痴漢でなくとも両手で鷲掴みしたくなる媚尻がむっちりと揺れた。

白いバスタオルは、ミニ丈のスカートほども脚線美を隠しておらず、むっちりとした太ももが惜しみなく敬悟を誘っている。

「うふふ。その気になってくれたみたいね。それならわたしの部屋に行きましょう。ここでは落ち着かないでしょう？　今日、優衣は用事があって遅くなると言っていたけど、万が一のことを考えたらわたしの部屋の方が……」

色っぽい表情で寝室へと誘ってくれる未亡人。あの志穂がこんな表情をするなど想像もできないほどゾクリとするおんな振りだった。

5.

「ああ、敬悟くんのおちんちん、やっぱり大きい……。ジーンズの盛り上がりから大きいだろうなって思っていたけど。まさか、こんなに立派だとは……。どちらかというと、敬悟くんって童顔でしょう？　そのギャップにちょっとドキドキしちゃうわ」

志穂の寝室に招き入れられた敬悟は、ただ事の成り行きを追うばかり。

未亡人が纏う甘い匂いが、その部屋にはたっぷりと充満している。

やさしくダブルベッドの上に腰かけるよう促されたかと思うと、未亡人はあっという間に敬悟のジーンズとブリーフを剥ぎ取ってしまった。
上半身に張り付いていた濡れたシャツは、先ほど脱いでいるため、敬悟は全裸でベッドに腰かけている。
恥ずかしさと緊張でどうしていいか判らないが、分身はますます意気盛んに前方に大きく突き出している。
「寒くない？　風邪をひかせないようにしないと……」
「だ、大丈夫です。全身が火照っていて、汗をかいているくらいだから……。そ、それよりも、どうして急に、こんなことを……。もちろん、僕は嫌じゃないけれど。その……。志穂さんが僕なんかを……」
いまさらながらに聞いてしまうのは、敬悟の気おくれがそうさせるものか。
けれど、それを志穂は別のものと受け取ったらしい。
「そうよね。敬悟くんは紗季のことが好きなのよね……。はじめては紗季としたいのでしょう？　うふふ。ピュアな君をこんな風に誘惑してごめんね」
ベッドに腰かける敬悟の前に傅くように、その身を沈ませる志穂。上目遣いのその瞳の色っぽさに息を呑む。

「でも、そんな君だからこそ、紗季をしあわせにしてあげられると思うの……。でもね、今のままでは難しいわよね。なんて言うかなあ、もっと男として……。少なくとも、紗季をリードできるくらいにならないと」
「あ、あの。話がよく見えないのですけど。僕が紗季さんをしあわせにって……」
「そうよ。君が紗季をしあわせにするの。弟の君にこんなことを言うのはなんだけど、紘一さんなんかより、君の方がよっぽど男として信頼できるし、紗季のことを任せられるわ。だから、紗季をお兄さんから奪っちゃいなさい。わたしが味方するから！」
思いがけない成り行きに、さすがに敬悟は目を白黒させた。要するに、未亡人は、敬悟の紗季への想いを知る上に、さらに義姉を寝取れというのだ。
目的は違えども、志穂は兄と同じように敬悟をけしかけている。兄の紘一より、よほど頼りないはずの敬悟の方が、紗季をしあわせにできると見込んでくれたらしい。
「でも、僕なんて、まだ高校生で……。紗季義姉さんには、男として見てもらえていないみたい……。僕なんて、相手にもされないのでは……」
「だから、わたしが味方をするの。わたしが大人のおんなの堕とし方を教えてあげるわ……。大丈夫よ。紗季のことを大切に想ってくれているなら……」
言いながらも未亡人の眼差しは潤んでいるように映る。ムードのある小さな照明に

照らされているからそう映るのか、実際に潤ませているのかは敬悟には判然としない。
「さあ、判ったら。余計なおしゃべりはこれくらいにして……。まずは、敬悟くんにサービスしちゃうわね。一度、射精しておかないと、こんなに硬くさせたおちんちんのままでは、指南どころではないでしょう？」
　ますます妖しい目をした未亡人が手を鉤状にし、指の腹を敬悟の厚い胸板から下腹部へと、ゆっくりと這わせはじめる。
「し、志穂さん。あうううっ……」
　すべやかな手指が上半身をフェザータッチでなぞっていく。途端に、全身の総毛が逆立つ。触れるか触れないかの微妙なタッチとは思えないほどの、快感がゾクゾクと背筋を走った。
「うおっ、うあ、あぁ……。志穂さんの掌、気持ちいい……」
　やわらかくもしっとりと吸い付いてくるような掌。女性に触られることがこんなにも癒やされ、心地よく、かつ官能が呼び起こされるものだとは思いもよらなかった。
「わたしの手が特別ではないのよ。男の人のごつごつした手でも、おんなは感じることができるのだから……。やさしく、愛情たっぷりに触るから感じてしまうのね」
　指南するのは後からと言いながらも、未亡人は手本を示し教えてくれる。

「特に、女性を触るにはやさしさが大事よ。いきなり強くなんかしちゃいけないの。壊れ物を扱うように繊細に……。はじめのうちはカラダの中心から遠くの方を……。掌のぬくもりを相手に伝えるくらいの気持ちで……」

身体の側面をじっくりと撫でられてから、情感たっぷりに胸板をまさぐられるうちに、すっかり敬悟の緊張はほぐされ、代わりに得も言われぬ興奮が沸き立つ。

未亡人のその言葉の通り、次第に肌が火照り、その鋭敏さを増していくのだ。

「あうううっ……あっ、し、志穂さん……」

掌底に乳首をやさしく擦られると、お尻の穴がムズムズするような、くすぐったくも芳醇な快感が沸き起こり、ツンと小さな乳首が勃起する。

「ほら、可愛い乳首が硬くなってきたわ……。こうなってからが唇でも愛撫していいサインよ……」

床に膝立ちしたまま、かすれた声を漏らしていた朱唇が敬悟の乳首にあてがわれた。ぬめっとした唇に乳首を覆われたまま、純ピンクの舌にくるくると乳輪の外周をあやされる。

「あうううっ……。あっ、あぁ……」

女性が乳首愛撫に喘ぐ気持ちが、ようやく判った。女の子のような呻きを漏らして

しまうことが、無性に恥ずかしくとも、どうにもできないのだ。
レロレロと舌先で小さな乳頭をあやされ、朱唇にちゅぱっと吸い付かれると、身体の力が全て抜け落ちてしまう。唯一、肉塊だけがやるせない快感に悲鳴を上げるようにガチガチに硬直を強めた。
それを見透かしたように美熟未亡人の手指が密林のような剛毛を指先で弄んでから、内ももものやわらかいところを擦っていく。
今にも分身を擦ってもらえそうなのに、そうしてもらえないもどかしさ。内ももや乳首からの焦れるような快感もあいまって、敬悟は勃起を断かせた。
菊座をムギュっと締め、括約筋を使って跳ね上げたのだ。途端に、ドクンと先走り汁が多量に吹き出した。
「まあ、すごい。敬悟くんのおちんちん、大きいだけじゃなく元気もいいのね。手も使わずに跳ね上げるなんて……」
未亡人が目元まで赤く染めながら、ついに猛々しい塊に手を伸ばし、太い胴の部分に指を巻きつけた。
「あんっ、こんなにしちゃって……。硬くって、それに熱い……。ああ、それにとっても太くて大きい……。小学生のころから知っている敬悟くんが、こんなに逞しく育

っていたなんて、わたしが年をとるのも当然ね……」
少しだけ寂しそうな口調で囁きながら、思い直したようにしなやかな指先で、隆起した牡肉の力強さを確かめていく。
「し、志穂さんが歳だなんて思いません。初めて会った時から全然変わっていないし……ものすごく綺麗だから……。あぐわあああぁ〜〜っ。し、志穂さぁん！」
そそり勃つ分身に巻きついていた手指が、絞るようにきゅっと締め付けたのだ。
「うふふ。ありがとう。こういう時に、相手を褒めるのは大切よ。とってもお上手でした……」
おどけた口調でなおも手淫快感を送り込んでくれる志穂。またしても尻に力を込め、肉塊をビクンと上ずらせた。込みあげる喜悦に、目を白黒させている。
「ぐふううぅっ……。お、おべっかなんかじゃないですよ。僕は、本当に思っていることを……ぐはあああぁぁ〜〜っ！」
繊細に男のツボを捉え、あやしてくれるから、ろくに言葉を紡げない。肉棒に染み渡る悦楽が、あまりによすぎてビクンと脈打たせては幸福感に満たされていく。
肉感的な女体がさらにその距離を詰め、べったりとカラダを擦り付けながらペニスを握りしめては、緩める動作を繰り返す未亡人。その肢体には未だバスタオルが巻き

つけられているものの、露出された二の腕や肩が敬悟のあちこちに当たりその滑らかさとやわらかさを味わわせてくれる。
彼女の太ももが内ももに擦れるのもたまらない。志穂のどこもかしこもが、童貞の敬悟にはもったいなさすぎるほどゴージャスであり極上なのだ。
垣間見える白い脛ですらゾクリとするほど美しい。
未亡人が身じろぎを繰り返すせいで、バスタオルの結び目が少し緩んだのだろう。隙間から乳暈の陰りが妖しく覗けた。見られることなど意識していない無防備な姿だからこそ、かえって艶めかしい。
（ああ、志穂さんのおっぱい。凄い！　えっ。ウソっ。乳首が尖っている？）
凄まじい喜悦に、ついつい女の子のような喘ぎをあげる敬悟に、甘い悪戯を仕掛ける志穂も興奮をそそられるのだろう。バスタオルにひしめき合っている乳房の頂点で、乳首がコリコリにしこり疼いているのが垣間見えた。
（気のせいじゃない！　志穂さんの乳首、勃起している……！）
うれしい発見に心が躍る。それは、未亡人が決していやいや奉仕しているわけではない証なのだ。
夫を亡くして以来ずっと空閨を囲い、志穂自身も無自覚なまま、肉体に不満をため

ていたのかもしれない。残酷なまでに熟れ切ったゴージャスボディなのだから、それも当然のこと。その寝かしつけてきた欲求が、敬悟に淫らな奉仕を与えることで顕在化してしまったのだろう。

おんなの生理などきちんと理解していない敬悟の勝手な思い込みにすぎないが、未亡人が発情をきたしているように見えてならない。

（ああ、凄いよ。あの志穂さんが、僕のおちんちんをいじりながら発情しているなんて……。こんなことが起きるなんて信じられない……）

夢でも見ているような心地ながら、下腹部から湧き上がる鋭い喜悦は本物だ。

「あぁ、本当に逞しいのね……。わたしの掌の中で、びくんびくんってしている……。敬悟くんの命が感じられるわ……」

ジェリービーンズのような朱唇が、熱い吐息を敬悟の胸板に吹き付けては、乳首をしゃぶりつく。

竿胴部に浮き上がった血管がドクンドクンと脈打つのが、敬悟の命の息吹を感じさせるのだろう。

「こんなに凄いおちんちんには、もっと刺激が必要なようね……。いいわ。もっと気持ちよくしてあげる……」

ますますその眼を潤ませて、未亡人の掌がゆったりとしたリズムで上下運動をはじめる。
赤紫の亀頭をパンパンに張り詰めさせた肉塊は、石のように硬く強張り、肉皮のどこにもたるみがないほどだ。その肉幹を未亡人の甘手がしごいてくれる。
「ぐふううっ。あっ、ああっ、し、志穂さん！」
二度三度と上下されると、切っ先から多量の先走り汁が染み出してくる。
志穂の美しい指先を穢してしまうのが申し訳なく思われたが、当の本人はそんなことなどまるで気に留めていないどころか、むしろそれを積極的に手指に絡め、潤滑油として利用する。
朱唇を半開きにし、亀頭をねっとりとした目つきで見つめながら、最初はゆっくり、そして徐々に速度を増して上下に手扱(てしご)きを繰り返す。
「どうかしら。わたし、上手にできている？　こんなことをするの本当に久しぶりだから……。気持ちいい？　強すぎたりしない？」
ずりずりと根元から上へ、上からまた根本へとしごきつつ、敬悟の表情を観察するような眼差し。謙虚な口ぶりながら、その視線には男の生理を知るものの自信が秘められている。

「いいです。ものすごく気持ちいい。ああ、志穂さんの手、最高です！」
「うふふ。そんなにいい？　うん。素直でよろしい。敬悟くんに、褒められるとうれしくなっちゃう。それって君の大きな武器ね……。だって、こんなに年上のわたしでさえ、もっと淫らにサービスしたくなってしまうほどだもの……」
目元まで紅潮させ、うっとりとした表情で志穂が言ったかと思うと、彼女はおもむろに立膝を正座に変化させ、敬悟の肉塊と正対するように傅いた。
「本当に特別よ……敬悟くんのおちんちん、舐めてあげるわ……」
相変わらず手指の絡めつけられている肉塊に、急速に美貌が近づいたかと思うと、窄められた朱唇がぶちゅりと鈴口に重ねられた。
「おわあああっ、し、志穂さぁぁん！」
たったそれだけで、ぞくっと下半身に震えが来た。ねっとりと湿り気を帯びた唇粘膜の感触は、手指以上に気色いい。
「ああ、敬悟くんのお汁、とっても濃くて塩辛い……」
手指を付け根に移動させ、未亡人の朱唇は何度も亀頭部を啄んでいく。
鈴口からぷっくらと沁み出す先走り汁に志穂の涎が混ざり合い、肉傘の滑光りがさらに増す。

背筋を走る甘く鋭い電流が、敬悟の太ももを緊張させ、時折腰が浮いてしまう。
「よほど、気持ちがいいのね。腰が落ち着かなくなったみたい……」
朱唇があんぐりと開かれ、天を突くほど肥大した肉勃起に覆い被される。生暖かい感触に亀頭部を覆われたかと思うと、なおもずぶずぶと肉柱全体が呑み込まれる。
「ぅうぉおおお〜っ！　の、呑み込まれる！　僕のちんぽが、志穂さんに呑みこまれるぅ〜っ！」
ねっとりした舌の感触が裏筋に絡みつく。勃起側面には口腔粘膜が張り付き、上顎のざらつきに上反りを擦られる。肉柱の半ばあたりを唇が締め付けてくる。
初体験のフェラチオ奉仕。それも志穂ほどの美人に咥えてもらえたのだから、その心地よさと満足感だけで、やるせない射精衝動が込み上げる。
かろうじて堪えられたのは、この美しい唇を自らの精液で穢していいものかとの危惧からだった。
気持ちよくなることは許されても、射精までは許されていない。間違えたタイミングで射精し、未亡人の不興を買いたくはなかった。
わずかに残された理性を総動員し、敬悟はギュッと掌を握りしめ、菊座を強く結んで、切なく込み上げる射精感を懸命に耐えた。

「うううううっ。だ、ダメです。志穂さん……。そんなことされたら僕……」
危険水域に達したと告げたつもりだが、むしろ志穂は敬悟をさらに追い込もうと、その美貌を上下に打ち振りはじめる。
付け根に添えられた手指で、やわらかく締め付け、もう一方の手は陰嚢を掴み取りやわやわと揉んでくる。
「ぐうぉぉ〜〜っ！　ダメっ。もうダメです。射精ちゃう。志穂さんのお口を汚しちゃいますよぉ！」
やるせなく込み上げる射精衝動に、オクターブの高い呻きを漏らさずにいられない。
「そんなに気持ちいいのね。熱いネバネバが射精したみたいに吹き出ているわよ」
肉塊を吐きだし未亡人が艶冶に笑う。目元まで紅潮させた扇情的な表情は、色っぽいことこの上ない。
「だって、志穂さんのフェラチオ気持ちよすぎて……。はぐうううぅ〜〜っ」
敬悟に言い訳する暇も与えず志穂が亀頭全体を掌で撫で回す。涎まみれになった肉幹をむぎゅっとやわらかく握りしめられ、挙句、裏筋も擦られている。やせ我慢も限界に、発火寸前にまで追い詰められるのも当然だ。
夥しくふき零した先走り汁に濡れた未亡人の繊細な指は、てらてらと下劣なヌメリ

を帯びながらさらに情熱を増した。
「いいわよ。敬悟くん。わたしの手でも、お口でも好きな場所に射精して……」
朱唇から漏れ出す吐息が、肉勃起の先端に熱く吹きかけられている。栗色のボブの髪から立ち上る甘く芳しい匂いも、敬悟を凄まじく陶酔させる。
慈悲深い許しをようやく得られた敬悟は、甲斐甲斐しくも奉仕を繰り返す美熟未亡人をうっとりと視姦しながら放出のトリガーを引いた。
「うぐぅっ……志穂さん、僕、もう……」
我慢の限界をとうに超えた陰嚢は硬く引き締まり、放精に向けての凝縮を終えている。膨らみきった肉傘が猛烈な熱を放ち、悦楽の断末魔にのたうちまわる。
「いいわよ。わたしがお口で受け止めてあげる……」
終わりを悟った未亡人が再び肉勃起を呑み込むと、その美貌を前後させて敬悟を射精に導いてくれる。
まるで若い牡を誑かすことで、成熟した牝がその矜持を満たそうとするように。
ふしだらな口淫のピッチが上がり、付け根を握る手指の締め付けも増していく。皺袋を弄ぶ手指の蠢きも、その淫蕩さを増した。
「ぐわぁぁぁぁ〜〜っ。で、射精ますっ！　志穂さぁ〜〜ん！」

精嚢で煮えたぎっていた濁液が尿道を勢いよく遡る。
興奮が正常な呼吸を阻害し、体内の熱気が気道を焼いた。
「うんんっ……。むふん……。んふぅ……。ああ、こんなにいっぱいぃっ！」
吹き上がる精子を喉奥で受け止めた未亡人は、ようやく亀頭部を吐き出すと、口腔いっぱいに撒き散らされた子種を恍惚の表情で呑み込んでくれる。
あまりにも淫らで美しいその貌を眺めながら、敬悟は射精したばかりの肉塊をぶるるるんと断かせた。

6.

「凄く濃いぃ精液……。あぁ、濃すぎてわたしのお腹の中で燃えているわ……。おんなのカラダを火照らせるほど濃い精液だなんて……」
色っぽく頬を紅潮させた志穂は、唇の端に付着した残滓を薬指で集め、扇情的な仕草でなおも舐め取っている。
「ああ、ウソっ。射精してもまだおちんちんギッチギチに固まったままなの？　射精したばかりで、まだ断くなんて……。こんなに凄いおちんちんならテクニックなんていらないかも……。敬悟くんのは、それくらい凄いものよ……」

ふざけ交じりに下腹部を他人と比べっこするなど中学生以下のすることで、思春期に入ってからはそんな機会ついぞなかった。まして自分の見慣れたものだけに、逸物との自覚など全くない。

褒められるのはうれしいが、ぴんと来ないだけに面映ゆい。

「ぼ、僕もこんなに収まらないの初めてです。いつもなら射精したら、すぐに萎えてしまうのに……。きっと志穂さんが魅力的すぎるから……」

そこまで言って敬悟は口を閉ざした。喉元まで出かかった未亡人とのＳＥＸを望む言葉を呑み込んだのは、シャイな性格もあるが、ここまできて断られた時のダメージが怖かったからだ。

「魅力的だからどうなの？　わたしとエッチしたいから、まだそんなに大きくなったままなの？　そうなのね？」

未亡人に言い当てられ、敬悟は顔を真っ赤にして頷いた。

「このまま続けて本当にいいの？　敬悟くんは、紗季としたいのではないの？」

先ほどと同じやり取りをあえて未亡人が繰り返すのは、自らの気持ちを整理したい思いもあるのかもしれない。

十五歳も年上である自分が、敬悟のような少年を相手にするには、相当な障壁があ

るのだろう。五年もの間、未亡人として操を守り続けた矜持。大人のおんなとしての自負。紗季の姉としての自覚もあるだろう。

いくら女体が火照り、発情をきたそうとも、それらを踏み越え、敬悟と結ばれるには、それだけの言い訳が必要なのだ。言い訳という言葉が悪ければ、免罪符と言い換えればいいかもしれない。

つまりは、敬悟から望まれているという事実。それが、やがて敬悟のためになるとの確信。妹の紗季のしあわせのためとの約束手形でもいい。

大人の中で育ってきたせいか、比較的敬悟には、そんな相手の心の襞を読み取る能力が備わっている。相手の顔色を見ると言ってしまえば、それまでかもしれないが、常に相手が〝本当は〟何を考えているのかを察しようと努めている。

いわゆる協調性が高いと評されるタイプで、要は空気を読むのがうまいのだ。

「正直、僕は紗季義姉さんのことが好きでたまりません。できるなら僕が義姉さんをしあわせにしたいです。でも、僕、志穂さんも大好きです。ものすごく美しくて、すっごくセクシーで……」

志穂の指摘通り、頭の片隅には紗季以外の女性と結ばれようとする自分への嫌悪がある。けれど、あのヨガの日以来、未亡人の妖艶な肢体に魅入られている自覚もあっ

た。
「志穂さん、気づいていたんですよね。ヨガの時、志穂さんの胸とかお尻を僕が見ていたこと。こんなに魅力的なんだって……。今も僕、こんなに興奮したことがないほどに……。やっぱり、それって、志穂さんが素敵だからで……」
いくら協調性が高くとも、空気を読むことに長けていても、敬悟はおべっかを使えない。口下手で、思いの半分も言葉にできずにいる自分が悔しい。もっとうまく伝えることができればと思ってしまう。
志穂が美しいから「やりたい！」だけでは、口説きにもなっていない。
けれど、そんな飾らない言葉、心から零れ出たそのままの言葉だからこそ、相手の心に沁みることもある。そんな奇跡が、いま正に起きた。それはとりわけ志穂が大人の〝いい〟おんなであったからこそ起きた奇跡なのかもしれない。
「つまり敬悟くんは、わたしのことを〝欲しい〟と思ってくれているのね。必要としてくれているってことよね……。判ったわ。だったら、わたしが敬悟くんを大人にしてあげる。おんなを教えてあげるわ……」
自らを諭すように、一つ一つ確認をする未亡人。やがて納得したように大きく頷いた。

「うふふ。そうやって、やりたいのならやりたいと意思表示するのは大事よ。けれど、やっぱり、敬悟くんは素敵な男性になりそうね……。早く紗季のことをしあわせにできる男になれるよう、わたしが指導するわ……。けれど、このことは紗季にも、優衣にも秘密よ」

明け透けな物言いも、この未亡人にかかるとまるで下品に感じられない。

志穂の慈愛に満ちた眼差しと、しっとりとした微笑が向けられる。それだけで敬悟の頬が一気に紅潮した。

「あの、それじゃ僕。紗季義姉さんだけじゃなく、志穂さんのことも……。僕を大人にしてくれる志穂さんもしあわせにできる、そんな男になります！」

子供っぽいかもしれないが、それが敬悟の心に浮かんだそのままの思いだった。そしてその思いを口にすることで、より一層、己の分身が硬くなるのを自覚した。

「まあ、そんなうれしいことを言ってくれるの？　うふふ。それに、いやらしいおちんちん。また嘶いている。いいわ。判ったわ。じゃあ、初めての敬悟くんに、たっぷりとおんなを味わわせてあげる」

言いながら志穂は、ベッドサイドに立ちあがると、自らのカラダに巻きつけていたバスタオルの結び目をいそいそと解いた。

途端に露になった、眩い裸身。空気に触れた胸乳が、ブルルンと揺れ、たわわに零れ出た。
「うわあああああぁ……。志穂さんのおっぱい、なんて美しいんだ！　美しすぎて目が潰れそうです……っ！」
現れた乳房の芸術的なまでの美しさ。メーター級もありそうな豊満なふくらみは、見事な丸みを保ったまま熟しきり、それでいて少しの型崩れもすることなく見事なまろみを形成している。これこそが志穂がヨガに励んだ賜物だろう。
その先端には綺麗な薄紅の乳輪が、薄く削られた貝殻ほどの段差でプックリと盛り上がり、乳首をツンと尖らせていた。
腰部は悩ましくも大きくくびれてから婀娜っぽいラインで左右に張り出していく。
ふっくらした恥丘には、漆黒の翳り。その直下には、志穂の秘密の苑があるはず。まだ見ぬ秘部を想像するだけで、のぼせて鼻血が出そうだ。
「志穂さん……」
ごくりと生唾を呑み込む敬悟に、艶冶に笑いながらゆっくりと未亡人がにじり寄る。
白昼夢でも見るかの如く、呆然とベッドサイドに腰かけたままでいる敬悟の胸元を、志穂がやさしく押した。

ベッドに仰向けになれというのだろう。
促されるまま、ゆっくりと上体をベッドに倒し、両肘を利用してその位置をダブルベッドの中央へと移動させる。
「うふふ。敬悟くん器用ね……」
おかしそうに笑いながら豊麗な女体がベッドに四つん這いになり追いかけてくる。
自在に容を変える白い乳房。釣鐘状にふるんと前後に揺れながらベッドサイドの照明に艶光りしている。
「せっかくなのだから敬悟くんに、女体の愛撫の仕方を教えたいのだけれど、それは次回にね。本当のことを言うとね、わたしの方が欲しくなってしまったの……。敬悟くんに言わせておいて、わたしもウソをつけないじゃない……」
志穂がうれしい告白をしてくれた。そればかりではない。今宵が最初で最後ではなく、これからも淫らな個人教授をしてくれると伝えてくれているのだ。
「志穂さん……」
あまりにうれしくて、またしても敬悟は肉塊を嘶かせた。
「ああん。その逞しさがわたしを淫らにさせるの……。だって、こんなおちんちんを見せつけるのは罪作りだわ。未亡人なのよ、わたし……」

うっとりと美貌を蕩けさせ、またしても志穂の手指が肉勃起を捉える。その誇らしげに天を衝く肉塊の真上に、むっちりとした美しい太ももが跨ってくる。
「し、志穂さん……」
緊張で喉が渇いているせいで声が嗄れる。
「初めてだからわたしが上でいいわね？　おんながどれほどいいか教えてあげる」
見惚れるばかりの敬悟は、口をあんぐりと開き、ぶんぶんと首を縦に振った。
「うれしいです……。志穂さんが僕の初めての人だなんて……志穂さん……僕……ぼくぅ……」
しかし、それ以上は、言葉にならなかった。それほどの感動と興奮、さらには緊張に襲われてどうにもならない。
「わたしもうれしいわ。敬悟くんの初めてのおんなになるのですもの……。光栄よ」
大きな瞳をキラキラと潤ませて、熱っぽく言葉を口にする未亡人。そっと腰を浮かせ、自らの陰部が敬悟の肉塊と交わる位置に寄せてくる。
それも腕を敬悟の太ももに乗せ、やや背後に背筋を反らし気味にして、女淫を近づけてくるのだ。
太ももの裏、尻朶は抜けるように白いのに、内ももの付け根から露出した女唇は、

赤みの強いピンクだった。ふっくらと唇のように肉が盛りあがり、無数の皺が繊細な模様のように走っている。

二枚の肉花びらは短い舌のように伸び、薄い。

女性器はグロテスクなものと聞いていたが、志穂の女淫は上品に整い、決してそんなことを感じさせない。

三十路の未亡人とは思えないほど、鮮烈な肉色は使い込まれていない印象だ。

「ああ、志穂さん……。これが、おま○こなのですね。綺麗なのに、ものすごくエロい……。おわっ！　ヒクヒクって蠢いている！」

いつもであれば相手を慮り言葉を選ぶ敬悟だが、今はそんな余裕もなく、見たままを口にしている。

「ああん。これでも恥ずかしいのよ……。言わなくていいから……」

さすがに未亡人が恥じらいを口にした。けれど、それとは対照的に、太ももの付け根は、じゅんと潤いを増し、しとどに濡れそぼっていく。

「すごい！　おま○こが透明な液をいっぱいに含んで、ピンクに輝いています！」

またしても敬悟の見たままのつぶやきに晒され、ついに志穂は顔を真っ赤にして首を左右に振った。

「いやいや。意地悪言っちゃいやよ！」
「あはは、志穂さんが急に可愛らしくなっちゃいましたね」
どれほど年上であっても、大人ぶって見せていても、女淫を晒すのは恥ずかしいらしく、本来の手弱女振りを露呈させている。
「もう。そんなにおばさんをからかうものじゃないわ……。童貞のくせにぃ！」
反撃とばかりに、志穂が握りしめたままの敬悟の肉塊をぞろりとしごいた。途端に甘い刺激が背筋を走り、思わず「おうっ！」と呻いた。
「ほら、自分だって、エッチなおちんちんをこんなに膨らませて……」
思わず腰を浮かせた敬悟に、未亡人が絡めた手指をきゅっと窄めてくる。
甘い締め付けに、堪えきれず敬悟は謝罪した。
「ごめんなさい。恥ずかしい思いをさせて……。でも、僕、からかったのではなくて、志穂さんのおま○こに感動して……。神秘的で、清楚で、なのにエロくって……」
「ああん。判ったわ。判ったからもう言わないで……。本当に恥ずかしすぎる……。敬悟くんにずっと見られているのも恥ずかしいし、いいわ、もう挿入れちゃう！」
敬悟の熱い視線に女淫を灼かれ続けることにも限界が来たのだろう。内ももをプルプルと震わせながら掠れ声も震わせている。

敬悟がうんと頷くのを見て、未亡人は細腰を引くと、痛々しいまでに膨らんだ肉茎の角度を変えさせる。
「こんなに大きなおちんちんがわたしの膣中に挿入るのね……。久しぶりなのに大丈夫かしら……」
図らずも漏らした志穂の不安は、敬悟の懸念でもある。
楚々とした入り口に、敬悟の肉塊を呑み込めるとは思えない。
それでいて、志穂の声の掠れには、期待と興奮が乗っている。
「し、志穂さん！」
敬悟の太ももに置かれた左手で、軽い体重を支えながら膣口に亀頭の先端が当たるように照準を定めている。
ゆっくりとこちら側にスライドしてくる細腰。切っ先と淫裂との距離が徐々に縮む。永遠に続くと思われたスローな動きで、ついに入り口が切っ先に触れた。
「ああん、すごいっ……敬悟くんの……おちんちん熱い……。こんなに熱いものだったかしら……わたしのおま○こが溶かされてしまいそう……！」
「志穂さんのおま○こも熱いです！　ヌルヌル、ヌメヌメなのに、すっごく熱い！」
ねちょっと触れた瞬間から亀頭部と肉花びらは互いの体温を交換し、粘膜と粘膜が

融合していく感覚を味わう。触れあうだけで腰が痺れるほどの快感に襲われた。
「おおおおおっ！　僕のちんぽ、志穂さんのおま○こに触れています。このまま挿入るのですね。僕、志穂さんとＳＥＸするのですね……！」
「そうよ。わたしの膣内に敬悟くんのおちんちんが挿入るの……。これで、わたしは敬悟くんのおんなになるのよ……」
　おんなの秘苑を視姦する敬悟に、耐えかねたように淫裂がムギュッと収縮をする。溢れ出た蜜液がタラーッと零れ落ち亀頭部に付着する。その濡れを利用して、未亡人がゆっくりと美尻を進めてくる。
「うううぅんっ！」
　悩ましい吐息と共に、プチュンと淫靡な水音が立った。切っ先が肉の帳に呑まれた瞬間だ。けれど、大きなエラ首に阻まれ、そこから先に進めないらしく、半開きにした朱唇を切なげにわななかせている。
「ああっ、敬悟くんの想像以上に大きい……っ！」
　艶めかしく呻いてから未亡人は、蜂腰を勃起に垂直の位置へとずらし、意を決したように落としてくる。
　ぬぷんッと亀頭部全体が嵌ると、後は勢いでズブズブズブッと垂直に肉幹を咥え込

んでいく。狭隘な肉筒が勃起肉をやわらかく締め付けながら奥へ奥へと受け入れてくれる。

まるでローションを塗りつけたビロードに肉柱を磨かれるよう。それでいて、筒の上側には、ざらつきがあり、そこに肉エラがしこたまに擦られて、凄まじい快感が沸き起こる。

肉幹の裏筋は、にゅるにゅるっとやわらかく包まれながら短い襞に舐めまわされている。甘く狂おしい愉悦。未知の快楽に、屹立肉が溶け崩れてしまいそうだ。

「ぅああ〜〜っ。や、やばいです。志穂さん、気持ちよすぎて、ぅふうううっ！」

悦楽と感動に咽ぶ敬悟に、嫣然と未亡人が微笑む。

「んふぅ……。敬悟くん、童貞卒業おめでとう……。いま二人は一つに繋がっているのよ」

「う、うん。僕のちんぽが、志穂さんのおま○こに、ぶっさりと刺さっています……。志穂さんの膣中、す、すっごく、あ、あったかくて、狭くてキツキツなのに、やわらかいです!!」

結合したまま二人は見つめあい、呼吸を整えようとじっとしている。いつの間に、二人とも汗びしょで、寝室の空気まで湿っていくのが感じられる。

「敬悟くんだって逞しいわ……。わたし、内側から拡げられているもの」
微妙に蠢く膣襞が、勃起全体をくまなくくすぐっている。
亀頭はすでに、痺れて感覚がない。そのくせ、気持ちよさだけはどんどん押し寄せてくるから、僅かにでも動こうものなら、即座に射精してしまいそうだ。
「これが、セックスなのですね。おんなの人の膣中って、こんなに気持ちのいいものだったのですね！」
「ああん……。それにしても、本当にすごいおちんちん！」
大きな質量は、成熟した肉体をもってしても、圧倒的であるらしい。
充溢感に驚いた媚肉が、未亡人の意思を離れ、勝手にひくひくと蠢いている。しかも、意図的にやっているのか、肉孔がきつく締まったり、ふっと緩んだりもするのだ。
「ああん、どうしましょう。本当に罪作りなおちんちん……。挿入れているだけで、火照ってきちゃうわ……」
朱唇から呻吟を漏らし、眉根を寄せて苦悶の脂汗を滲ませる志穂。亀頭のふくらみ、エラの張り具合、そして血管でごつごつとした肉幹の感触。その一部始終を媚肉で味わうかのように、まんじりとして動かない。否、動けないのかもしれない。
「ああん。こんなはずじゃなかったわ……。なんて凄いの……こんなの初めてよ……

挿入ただけでイッてしまいそうになるなんて……」
肉棹の胴回りと長さに艶尻を震えさせている。その熱さ、その硬さ、そしてその質量に圧倒された膣襞が、なおも淫らな蠕動を繰り返す。
「あううう、す、すごいのっ。わたしのおま○こが、覚え込まされている。敬悟くんの容に作り替えられているみたい……」
長きに渡り空閨を囲ち、寝かしつけていた欲求が解放された今、未亡人の肉体は貪欲なまでにその官能を悦び、豊麗な女体を小刻みに震わせている。
苦悶とウリ二つの表情は、苦痛のそれではないらしい。押し寄せる官能に、息を詰まらせ、美しい眉根を寄せ、朱唇をわななかせているのだ。
(志穂さんがおんなの貌になっている。なんて淫らなんだ。でも、超きれいだっ!)
真っ赤な顔でされるがままでいた敬悟は、ついに堪えきれずに引き締まった腰をぐんと突き出した。
「いやんっ……ちょ、ちょっと待って……。まだ動かすのは……。もう少しだから……。敬悟くんを付け根まで迎え入れてあげたいの……」
未亡人の言う通り、分身は八割方呑み込まれているものの、未だ付け根までの挿入はなされていない。

けれど、引き締まった志穂のお腹は、今にも敬悟の分身がぽっこりと浮かび上がりそうなほど華奢に感じられる。ただでさえ入り口は限界に近い状態にまで拡張され、これ以上の挿入は、それこそ未亡人が壊れてしまうのではないかと不安だった。

「心配しなくても大丈夫。おんなは、とてもしなやかなものよ……。敬悟くんの全てを迎え入れるのは、おんなとしてのわたしの歓びでもあるのだから……」

敬悟の不安を察した未亡人がやさしくも慈愛たっぷりに微笑んでくれる。そして、いい終わるとすぐに、志穂の両膝が思い切ったように蟹足に折られた。刹那に、敬悟の肉塊が、ずぶんっと根元まで嵌まり込む。

「はううううううっ！」

美しい鼻筋が、くいっと天を仰いだ。

敬悟の胸板に両手が置かれ、全体重を預けるように座り込んでしまっている。

「うううぅっ！　お、奥まで届いているわ……。わたしの子宮に、おちんちんが届いているの判るかしら……？　あぁ、こんなの初めてよ」

悩ましい喘ぎをあげて志穂が、子宮底に鈴口が達している感覚を教えてくれる。

確かに、軟骨のようなコリコリが鈴口に当たっているのが判った。

「ああ、熱いわ……おま○こに火掻き棒を詰め込まれたみたい……。でもそれがたま

らないの。じんわりとお腹の底を温められているようで……。ああ、本当に熱い」
志穂が蜜のような匂いの息を小出しに吐き出す。すると、ようやくカラダの内側から緩むらしく、敬悟を食い締める膣肉の圧迫も和らいだ。存在感たっぷりの肉柱に、媚肉が馴染んだのだろう。
「凄いです！　根元まで挿入ると、余計に気持ちいいっ！　僕のちんぽが全部、志穂さんの膣中に！」
「ええ。そうよ。もう志穂は敬悟くんのおんななのよ。これからは、もっとエッチなことを教えてあげる。こんなに年上のわたしでよければ、いつでもさせてあげる」
上体が倒れてきて、うっとりした表情が感激に震える敬悟の顔に近づく。あらためて向き合うと、紅潮した頬をつやつやさせた志穂の妖しい美しさに、愛しさが込み上げた。
「ああ、敬悟くんがカワイイ……。顔を真っ赤にさせて赤ちゃんみたい……。うふふ、わたしの敬悟くんっ」
敬悟のおんなとなる契約の証。女神の祝福のような口づけが、敬悟の唇に。そのぷるんとした感触と甘さをたっぷりと味わわせてくれる。
図らずもファーストキスまで経験できたとあれば、残る望みはただ一つ。

「ねえ、志穂さん、おっぱいに触ってもいいですか？」
それは敬悟がずっと堪えてきた欲求。あまりに神々しいふくらみに、今まで触れることが憚られていたのだ。
「ええ、いいわよ。このふくらみももう敬悟くんのものだから……」
許してくれた未亡人は、敬悟に触りやすいようにと、再びその上体を起こしてくれた。その無防備なふくらみに、敬悟は感極まった面持ちで下から手を伸ばした。
指が乳房の丘陵に触れた途端、磁石のように吸いついて離れない。否、離すことができない。吸いつくような滑らかな感触。湿り気があり、それでいて温かく、敬悟の指ばかりか心までも吸い寄せて離さない。
「初めてナマで触れるおっぱいが、志穂さんのおっぱいだなんて、僕にはぜいたくすぎです」
ゴージャス極まりないふくらみに、自分如きが触れているなど信じられない。それも彼女の媚肉の中に分身を埋め込んだまま生乳房を味わっているのだから一入だ。
「ああん。敬悟くんのその手つきいやらしい……。大切そうに扱われるのは悪い気分じゃないけれど、そんなに触られたら、おっぱい感じちゃうわ……」
細腰を捩らせて身悶える志穂。その頂点に位置する乳首が、にわかにしこりを帯び

ていく。
「はぁあ……」
眼を閉じて顔を横に向けた志穂が、悩ましく息を吐いた。掌の中、やわらかく動くふくらみを敬悟がやさしく揉み潰したからだ。
指先が乳肉に埋まるたびに、薄く朱に染まった乳房が、容器から出したばかりのプリンのようにプルプルと揺れた。
「ああ、もうだめっ。我慢できない……。おっぱいの火照りが、おま○こにまで伝わり、疼いているの……。はしたないわね。わたし、発情している……。ねえ、動かしてもいいかしら……。敬悟くんも我慢できなくなったら膣中に射精していいわよ」
胸元から沸き起こる甘い快楽に負けた未亡人が、くんと蜂腰を蠢かせた。
身悶えた腰つきが、そのままムチを打たれたかのように前後運動に変化する。
ねちょっと勃起がひり出されては、ぬぷぬぷんっと呑み込まれる律動に、一気に敬悟の性感も高まる。ただでさえ上がっている体温が、さらに上昇し、理性が粉々に砕かれて、吐精だけが頭を占めた。
「うあああっ、し、志穂さんダメですよぉ。そ、そんなあぁ……」
突如はじまった腰つきに、敬悟は慌てて歯を食いしばった。そうでもしなければ、

すぐにでも漏らしてしまいそうだ。
その妖しい嬌態は、もはや見慣れた志穂のそれではない。下半身の動きと肉感は、エロすぎるほどふしだらだ。
「ああ、ウソっ。少し動かしただけで、こんなにいいだなんて……。も、もう、わたし、イッてしまいそう……。こんなに敏感になるの初めて……。ぅふぅ、あぁ、あっ、あぁん……いいの。たまらないわ……」
切なげに啼きながら、お腹をうねらせ蜂腰を前後させる未亡人。貪欲に喜悦を貪る律動に、なす術もなく敬悟は翻弄されていく。
もっと、この瞬間を味わっていたい気持ちはやまやまだが、込み上げる射精感に、我知らず敬悟も腰を突き上げていた。
本能に任せた抽送は、どこかギクシャクしてお世辞にもスムーズとは言えない。けれど、ありったけの情熱と愛情を込めた抜き挿しなのだ。
「ぐふううう……。志穂さん……ああっ、超気持ちいいよぉ。志穂さぁんっ」
熱くその名を呼びながら、ズンズンと腰を突き上げる。若さに任せた単調な抽送ながら三十二歳の熟れた肉体には快美らしい。
「いいわ。ねえ、もっと……。ねえ、もっとよ」

扇情的な求めをぽってりした朱唇から漏らし、悩ましい腰つきがさらに速度を増す。ゆったりしたフラダンスのような優雅な腰の動きが、徐々にテンポを上げ、やがてはロデオのような激しい腰つきへと変化するのだ。

「あぅんっ……ああ、いいの。たまらないわ……。どうしようこんなに淫らに腰を振って……。恥ずかしいくらい敬悟くんのおちんちんに夢中になっている……あっ、あん、あはぁ……」

ついには、自ら腰を上げては、蜂腰を落とす上下の動きで、激しいよがり声をあげている。ぢゅっぷ、ぢゅっぷと淫らな水音を立てさせ、自らの子宮口に敬悟の切っ先を打ち付け、沸き上がる恥悦に陶酔するのだ。

淫らなおんなの本性を見せつける志穂に、敬悟もぐいぐい腰を持ち上げて、肉柱で串刺しにする。

「ああ、イクぅ……。志穂、イッちゃう……。敬悟くんの童貞おちんちんで、恥をかくわっ！」

その瞬間、ゴージャスな女体が敬悟の身体をべったりと覆った。

つるすべ美肌の温もりともっちりとしたやわらかさ。大きな乳房が胸板で潰れる得も言われぬ感触。敬悟の顔に振り乱された雲鬢の甘い香り。汗まみれの女体から漂う

発情メスのフェロモン臭。おんなの魅力の全てを味わいつくし、陶然と敬悟は尻を浮かせて、突き上げまくる。
「イクっ！　ああ、イクぅっ！」
あれほどまでに上品で、貞淑であった未亡人をアクメさせたのだから興奮しない方がおかしい。その満足と悦びが、もどかしくも、やるせない射精衝動に変換され、皺袋に蓄積された。
「僕もです。志穂さん。僕も射精くっ。ああ、志穂さ～～んっ！」
「来てっ！　お願い……。わたしの膣内に……あはぁっ……敬悟くんの精子で子宮をいっぱいに満たしてっ！」
淫情に煙る妖しい瞳で未亡人が受精を求める。細腕が首筋にすがりつき、ゼロ距離で絡みついてくる。敬悟は一瞬、躊躇うように未亡人を見たが、激しい突き上げを止めることはない。
限界にまで膨らませた肉塊で膣孔を磨き、勢いよく抜き出しては、また埋め込む。
「はうん！　あん、あん、あぁ。イクっ！　敬悟くん、イクの、またイクぅ～～っ！」
「ぐうぉおお～っ。射精るよ、もう射精るッ、志穂さぁ～～んっ！」
未亡人がより淫らに昇り詰めたとほぼ同時に、敬悟も達した。我慢汁と蜜液がたっ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索